

源氏物語と長恨歌

其一

上野英二

其一 事の忌み

二日^{壬子}晴、今日覽初音卷光源氏物語

(文明七年一月二日)

二日^{丁丑}天霽……昼間覽初音卷、佳例也

(文明十三年一月二日)

二日^{庚寅}大雪尺余、預呈豐年瑞、珍重々々、朝間覽初音卷

(文明十六年一月二日)

二日^{乙酉}雨降……初音巻覽之、毎年之嘉例也

(文明十七年一月二日)

二日^{癸卯}天晴……今日覽源氏初音巻

(文明十九年一月二日)

戦乱うち続く戦国の世にあつて、家学として『源氏物語』を伝え、当代切つての源氏学者の輩出した三条西家。その基礎を開いた三条西実隆の日記、『実隆公記』には、ほぼ例年、一月二日に「初音巻」を「覽」たことが記されている。

言うまでもなく「初音巻」とは、『源氏物語』五十四帖、その二十三帖に数えられる初音の巻である。正月の二日、『源氏物語』初音の巻を披見することが、どうやら三条西家の「嘉例」であつたらしい。「これは、明応五年正月二日の条に、「初音巻覽之、是例年之儀也」といひ、永正三年の同じ日の条に、「覽初音巻、嘉例也」といつて居る通り、毎年⁽¹⁾の嘉例として、正月二日初音巻を読んだので、少くとも永正九年、彼が五十八歳の年までは、この読初を続けたらしい」(山脇毅「三条西実隆と源氏物語」、『源氏物語の文献学的研究』所収)。新年をことごとく「読初」にふさわしい書物として、三条西家では初音の巻が読まれていたのである。

年月をまつに引かれて経る人に今日鶯の初音聞かせよ

(初音)

「年立ちかへる朝の空のけしき、名残りなく曇らぬうら、けさには」と、新装成った六条院に春の朝の訪れを告げて始まる初音の巻は、なるほど新春をことほぐにふさわしい巻ではあった。

けれども、『源氏物語』の首巻は桐壺。何故に三条西家では、第一帖桐壺の巻ではなく第二十三帖初音の巻を「覧」ることが「読初」の「嘉例」であつたのであろう。

『源氏物語』の三条西家に対して、連歌を以つて立つた猪苗代家においても、『源氏物語』を読む場合には、初音の巻から読み始めるのがならわしであつた。橋本経亮『橘窓自語』には、その理由が明確に述べられている。

連歌師猪苗代の家には、源氏物語を読む時に、初音の巻より読み始むるなり。これは桐壺の巻には憂れはしき事のある故なり。明星抄の説に、初音より読むことありとおぼゆ。

「憂れはしき事」。その内容の不吉さゆえに桐壺の巻は、開巻第一の巻でありながら、『源氏物語』読初の巻の榮譽を、初音の巻に譲つたのである。

例えば『無名草子』は、桐壺の巻を『源氏物語』随一の巻と称揚しながら、「あはれに悲しき事、この巻に籠りて侍る」と付け加えるのを忘れない。

桐壺に過ぎたる巻やは侍るべき。「いづれの御時にか」とうち始めたるより、源氏初元結の程まで、言葉続き、あり様を始め、あはれに悲しき事、この巻に籠りて侍るぞかし。

あはれなる事は、桐壺の更衣の失せの程、帝の嘆かせ給ふ程。「長恨歌の女も思ひし限りあれば、筆及ばざりけん。尾花の風に靡きたるよりもなよびかに、唐撫子の露に濡れたるよりもらうたく、なつかしかりし御様は、花鳥の色にも音にも、よそふべきかたぞなき。

尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこ知るべく

とて、燈火をか、げ尽くして、眠ることなく眺めおはします」などあるに、何事も残りの六十巻はみな推し量られ侍りぬ。

「あはれなる事は、桐壺の更衣の失せの程、帝の嘆かせ給ふ程」。『無名草子』にも言われるように、『橘窓自語』の言う「憂れはしきこと」の第一は、桐壺一卷のうちに、光源氏の生母、桐壺更衣の死が描かれることであつた。帝の寵を一身に受けながら、桐壺更衣は周囲の羨望と嫉妬の渦の中で病を得、やがて死に至る。続く、帝の愁嘆、そして母北の方の失意の死。光輝燦然たるべき、主人公光源氏の出生を語る開卷第一の巻ながら、桐壺の巻は「憂れはしき事」に満ちている。こうした内容を勘案するならば、桐壺の巻を新年をことほぐ、めでたかるべき『源氏物語』読初の巻とすることは、なるほど避けるに越したことはなかった。

しかも、その更衣の死を嘆く桐壺帝を描く、桐壺の巻の圧巻、野分の段の季節は秋。

野分だちて、にはかに肌寒き夕暮のほど、常よりも思し出づること多くて、鞍負の命婦といふを遣はす。夕夜のをかしきほどに出だし立てさせ給ひて、やがて眺めおはします。

(桐壺)

時は、夕暮から夜。しかも風雲ただならぬとすれば、これはいよいよ新春の嘉例、読初の巻とするにはふさわしくなかった。

文学作品の、その内容の吉凶を気にすることなど、現代の眼からすれば、あるいはそれは滑稽に映るかも知れない。けれどもかつては、読むべき書物は時に応じて吟味されねばならなかった。⁽²⁾

昔は、正月吉書かきぞめの次に草子の読初とて、女子は文正草子を読みしとなり。今もある大家にその古例残りてあり。この草子、今多く伝はり、大本、小本、摺板はんぎの数あるも、昔は家々になくは叶はざりし草子なりしが故なり。標題に「いはひの草子」と書きたるあり。これ、その証なりと、古老の記に見えたり。按ずるにこの説さもあらんか。

（柳亭種彦『用捨箱』）

致富榮達、一家繁昌。果報者文正の一代を描く『文正草子』は、その内容のめでたさ故に、江戸の人々に読初の草子として尊重されたのであった。渋川板『御伽草子』本文の末尾には、

まづくめでたきことの始めには、この草子を御覧じあるべく候。

と謳われている。書物の内容とそれを読む者の生活とは、しばしば直結すると考えられたのである。

古く平安朝として事情は大きく変らなかつたことであろう。他ならぬ『源氏物語』にも、物語がその内容の不吉

さ故に、晴れがましい所へ出すことが憚られたことが記されている。

長恨歌、王昭君などやうなる絵は、面白くあはれなれど、事の忌みあるは、こたみは奉らじ、と選りとゞめ給ふ。
(絵合)

絵を好まれる冷泉帝のために、光源氏は襲藏の絵巻の類を献じようとする。しかし、その中で『長恨歌』、そして『王昭君』を描いた「絵」は、「事の忌み」のある故に、献上が見合わされたという。藤壺の御前での絵合には、『竹取物語』、『伊勢物語』、『うつほ物語』、『正三位物語』などの絵巻が出陳されたにもかかわらず、『長恨歌』、『王昭君』の「絵」が「選りとゞめられ」たのは、ひとえに「事の忌み」、すなわち内容の不吉さゆえであった。

楊貴妃如きは、あまり時めき過ぎて悲しき事あり。王昭君は胡この申すに賜りて胡の国の人となり、

(『大鏡』太政大臣道長)

言うまでもなく、『長恨歌』では、玄宗皇帝は楊貴妃を溺愛し、安祿山の反乱を招く。楊貴妃は殺害され、玄宗は悲嘆の日々を送ることとなる。『王昭君』また同様⁽³⁾。漢代の宮女、王昭君は絵師に賄賂を贈らなかつたばかりにその絵姿を醜く描かれ、ために選ばれて胡国へ嫁がされることになる。王昭君は泣く泣く辺塞の地に下り、むなしく彼の地で客死する。いずれも悲運、不吉な内容の物語であった。その内容の故に、これらの物語は、帝

への献上が憚られたのであった。

『長恨歌』が不吉な物語と意識されていた記事は、『更級日記』にも拾うことができる。

世の中に、長恨歌といふ文を物語に書きてあるところあんなりと聞くに、いみじうゆかしけれど、え言ひよらぬに、さるべき便りを尋ねて、七月七日言ひやる。

契りけむ昔の今日のゆかしさに天の川波うち出でつるかな

返し、

立ち出づる天の川辺のゆかしさに常はゆ、しきことも忘れぬ

平安朝において、『長恨歌』が和文の物語に仕立てられていたことを伝える貴重な記事であるが、これによれば、『長恨歌』はやはり、「ゆ、しき」物語とされていたことが窺える。

とするならば、桐壺更衣の悲運を描く『源氏物語』桐壺の巻が、読初に忌まれたことも、十分に理解できるであらう。

そもそも『源氏物語』の桐壺の巻は、『長恨歌』を下敷にして書かれている。桐壺の巻は、言わばその、一種の変奏であった。玄宗皇帝は桐壺帝に、楊貴妃は桐壺更衣に移されている。したがって、楊貴妃の悲運を描く『長恨歌』に「事の忌み」があったとするならば、他ならぬ『源氏物語』桐壺の巻にも、同じく「事の忌み」があったと考えなければならない。

『長恨歌』同様、それを踏まえた『源氏物語』桐壺の巻は、平安朝の人々にとって、忌まわしい、不吉な物語と意識されたと考えられる。すなわち『源氏物語』は、その「事の忌み」を自ら犯す格好で、不吉窺まる物語で幕を上げていたということになるであろう。

大体、開卷早々、主人公の登場以前に、悲恋や死という暗い話を纏綿と繰りひろげる物語など、物語としても不吉なのではなからうか。「事の忌み」に満ち満ちた桐壺の巻は、そもそも一大長篇物語の開幕を飾るにふさわしい巻だったのか。

例えば、開卷第一の巻に春の部を立て、巻頭を「年内立春」の歌で飾る『古今和歌集』。

ふる年に春立ちける日、詠める

在原元方

年の内に春は来にけりひと、せを去年とや言はむ今年とや言はむ

『古今集』は、年に先んじてまで春が勇んで訪れてくれたことを慶ぶ、春の歌で始められている。⁽⁴⁾

これは漢詩文集も同断。『凌雲集』、『文華秀麗集』、『経国集』、勅撰三集いずれも巻首には春の詩賦が置かれている。『萬葉集』しかり。二十一代集しかり。

あるいは、「初冠して」、颯爽と人生のスタートを切った「男」の、初めての恋を語って始まる『伊勢物語』。

昔、男、うひかうぶりして、奈良の京春日の里にしるよし、て、狩にいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男、垣間見てけり。思ほえず、古里に、いとはしたなくてありければ、心地惑ひにけり。男の、着たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きて遣る。その男、信夫摺りの狩衣をなむ着たりける。

春日野の若紫のすり衣しのぶの乱れ限り知られず

となむ、老いづきて言い遣りける。ついで面白きこと、もや思ひけむ、

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。

『伊勢物語』は、現存諸本、ほぼすべてこの段をもつて始められるが、文中、「若紫」の語などに徴して、季節は恐らく初春。『伊勢物語』初段には、主人公の人生の開幕と、一年の始まりと、物語の開始という、三つの始発が揃えられている。

あるいはまた、季節も春、時も払曉。黎明の描写から筆を染める『清少納言枕草子』。

春は曙。やう／＼白くなりゆく山際、ほのかに明りて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

ここでは、作品の始まりと一年の始まり、そして一日の始まりと、三拍子が整えられている。

これら平安朝を代表する如き諸作の冒頭と対比するならば、ひとり『源氏物語』が、桐壺の秋で始まること、しかも時は夕暮から夜、そしてその内容があまりに不吉であることが際立つて来るであろう。

死、秋、夜。作品の始発の位置にありながら、その内実が衰亡、終焉の方向への傾きを示すことは、『源氏物語』独得のものと言うべきものかも知れない。⁽⁶⁾

『源氏物語』中で主要人物が死ぬのは秋が多い。「人々に悲傷の限りをつくさすには、背景を秋にするのがよいからである。さなきだに見るもの聞くものすべて物思わせる時期である」。「桐壺は夏に死んだ。夏死んだ人を悲しむさまを、四十九日もすんで今、秋を背景にえがくのである」(玉上琢彌『源氏物語評釈』)。桐壺巻の秋の夜の描写は、桐壺更衣の死と表裏一体、意図的に選ばれたものであった。

作品の始め方ということに着目するならば、桐壺の巻の情景は、物語開巻の巻としては、やはりあまりふさわしいものではなかったのではないか。季節の点においても、「事の忌み」のある点においても、『源氏物語』の始発は異例に属する。これは如何に考えるべきことであろうか。

桐壺の巻に、「事の忌み」が認められることは、ひとえに桐壺更衣の悲劇の範型を『長恨歌』に仰いだことに依る。「楊貴妃の例」^{なほ}と本文にもある通り、桐壺の悲恋は、『長恨歌』に記す、玄宗・貴妃の逸事の翻案であるし、野分の段の秋の描写も、恐らく『長恨歌』の「秋雨梧桐葉落時」⁽⁷⁾西宮南内多「秋草」落葉滿「階紅不」掃、「秋燈挑尽未」能「眠」遲遲鐘漏初長夜」あたりによって構成されている。

命婦、かしこにまで着きて、門引き入る、より、けはひあはれなり。やもめ住みなれど、人ひとりの御かし

づきに、とかく繕ひ立て、めやすきほどにて過ぐし給ひつる、闇にくれて臥し沈み給へるほどに、草も高くなり、野分にいとゞ荒れたるこゝちして、月影ばかりぞ、八重葎にもさはらず射し入りたる。

月は入り方の空清う澄みわたれるに、風いと涼しくなりて、草むらの虫の声々もよほし顔なるも、いと立ち離れにくき草のもとなり。

鈴虫の声の限りを尽くしても長き夜あかずふる涙かな
えも乗りやらず。

いとゞしく虫の音しげき浅茅生に露おき添ふる雲の上人

月も入りぬ。

雲の上も涙にくる、秋の月いかですむらむ浅茅生の宿

おぼしめしやりつゝ、燈し火をかゝげ尽くして起きおはします。右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし。

(桐壺)

桐壺の巻に「事の忌み」があるとなれば、それはそのまま、『長恨歌』の「事の忌み」のゆえなのであった。

『長恨歌』が不吉とされた例は、『源氏物語』にもう一箇所見出される。

長生殿の古き例はゆゝしくて、翼を交さむとは引かへて、弥勒の世をかね給ふ。

(夕顔)

後に夕顔と呼ばれることになる女に対しての源氏の睦言。「長生殿の古き例」とは、『長恨歌』比翼連理の誓い、『七月七日長生殿 夜半無人私語時 在天願作比翼鳥 在地願為連理枝』。口説き文句に、ことさらそれを避けたのは、やはり『長恨歌』の悲恋が「ゆゝし」、不吉であつたからに他ならない。結局は悲劇に終わつてしまつた誓いを口にすることは、この時の源氏にとっては縁起でもないことであつた。

しかし、桐壺の巻では、その不吉窺まる誓言が桐壺帝と桐壺更衣との間に交されていた。

朝夕の言ぐさに、翼を比べ、枝を交さむと契らせ給ひしに、叶はざりける命の程ぞ、尽きせず恨めしき。

案の定、比翼連理の故事の「ゆゝしさ」は観面に現われて、桐壺更衣は楊貴妃と同じ悲運に見舞われることになる。

何故、『源氏物語』は、開扉の巻として、望むべくんばめでたかるべき桐壺の巻において、「事の忌み」ある『長恨歌』を踏まえたのであろうか。『長恨歌』の筋立を下敷にすることによって、『源氏物語』は、開巻早々『長恨歌』からその「事の忌み」までを引き継いでしまつた。

忌むべき不吉を背負つてまで、桐壺の巻が『長恨歌』の筋を襲つて書かれたのは、如何なる理由によるものか。物語を始めるに当って、『長恨歌』を踏まえたことは、『源氏物語』にとってはよくよくのことであつたと考え

べきであろう。

もちろん、桐壺の巻は現行『源氏物語』の第一巻と位置付けられているが、そのことと執筆乃至は発表の順序とは必ずしも同じではない。むしろ、桐壺の巻の執筆乃至発表は、その巻序とは別に、他の諸巻に遅れるもので、他の諸巻がある程度発表された段階で、執筆、発表されたと考えられている。

「桐壺」の巻が最初に書かれたものでなく、主人公の系譜、地位の説明として、後から発端に据えたものであらう事は、多くの説の一致する所である。

（池田亀鑑「源氏物語」、藤村操編『増補改訂日本文学大辞典』）

しかし、それならそれでなおのこと、『長恨歌』を踏まえることで「事の忌み」を抱え込むことになった桐壺の巻が、『源氏物語』の「発端」として位置付けられることになった意味は考えられなければならないだろう。

恐らく『源氏物語』にとっては、『長恨歌』を踏まえることの不吉、そして、それを作品全体の始発として位置付けることの不吉、そんなことは重々承知の上であった。その上で『源氏物語』は、そのスタートの基点を『長恨歌』に拠んだものと思われる。

『源氏物語』にとつての『長恨歌』、その意義はいよいよ重大なものであった、と見なければならぬ。

注

(1) これより古く文永六(一二六九)年九月、飛鳥井雅有には阿仏尼の源氏物語講釈を聴聞することがあったが、これは通常の巻序によるものであったと思われる。すなわち、その記録『嵯峨のかよひ路』。

十七日、昼ほどに渡る。源氏始めんとて、講師にとて女あるじを呼ばる。簾の内にて読まる。まことに面白し。世の常の人の読むには似ず、習ひあべかめり。若紫まで読まる。(中略)

十四日、朝顔より初音に至る。

(2) この問題に逸早く着目した佐竹昭広「東寺の塔」、(『閑居と乱世 中世文学点描』)は、次のように言う。

周知のように、正月の吉書初には祝言性豊かな物語を読む習慣があった。

かかるめでたき草子なれば、まづ正月の読みはじめに此草子を読み、国に大明神といははれ、貴賤群集なしにけるなり。(鶴亀松竹)

かかるめでたき物語、一遍読みたるその人は、清水結びの神に、子やすの地藏へ一度参りたまふにむかふべし。又、年のはじめに読みたまはば、夫婦のなか、幾ちよまでに栄へ、妻なき人は妻をもとめ、富貴栄華と栄へ給ふべしとぞ。(子やす物語)

此草子御覧ぜんともがらは御家は富貴に、眷族も不足なく、孫、ひこまでも栄へたまふべし。正月のはじめに此草子を御覧じはじめたまはば、住吉の大明神御めぐみあるべし。めでたや、我みてもひさしくなりぬ住吉の岸の姫松幾代へぬらん。(住吉物語)

そして、吉書の代表が文正草子であったことは言うまでもない。

ただし、ここに引かれた『住吉物語』が何本に拠るのか、今詳らかにし得ないが、『住吉物語』にはその冒頭に

「年月重りて、八ばかりになり給ひける年、母宮、例ならず悩み給ひけるが、日を経て重くのみなりまさり」、「明かし暮らすほどに、世の、あはれにはかく、常無き所なれば、情なく、昔語りになり果てにけり」（広島大学蔵奈良絵本）等の、母宮の死を告げる記事を見る。しかし、それは短小な出来事の報告の位置にとどまって、全体の「祝言性」を損うものではなかったと思われる。

(3) 平安朝においては、『漢書』、『後漢書』、『文選』、『白氏文集』等によって、王昭君も『長恨歌』の楊貴妃に並んで、ともに著明であった。

王昭君を胡の国へ遣り給へる、楊貴妃を殺させ給へる、帝無くやはありける。

(『うつほ物語』国譲下)

かの国には、女すぐれたるなるべし。楊貴妃、王昭君、李夫人など言ひて、あがりての世にもあまたありけり。いみじき楊貴み王せん君なども、たゞうるはしう候ひけるなんめり。

(『浜松中納言物語』卷三)

(4) 本邦初の勅撰和歌集の劈頭を飾る歌でありながら、この歌はすこぶる評判が悪い。曰く、先づ『古今集』といふ書物を取りて第一枚を開くと直ちに「去年とやいはん今年とやいはん」といふ歌が出て来る、実に呆れ返つた無趣味の歌に有之候。日本人と外国人との合の子を日本人とや申さん外国人とや申さんとしやれたると同じ事にて、しやれにもならぬつまらぬ歌に候。

(正岡子規『歌よみに与ふる書』)

しかしこの歌、本当に「呆れ返つた無趣味の歌」と断罪されるべきものであろうか。

これに疑問を呈した川口久雄「『古今和歌集』と漢文学——年のうちに春はきにけり」という歌について——(『西

域の虎―平安朝比較文学論集―」は、「年内立春」のテーマを文学史に辿った。

年内立春を意識した作品はまず家持などが古いところらしい。(中略)

次いで道真は新撰万葉などではそういう歌をとったりしてはいないが、自ら漢詩に年内立春をよんでいる。仁

和四年(八八八)十二月二十六日、任地讃岐で立春を迎えた時の七律である。(中略)

このほか延喜元年(九〇一)十二月十九日、太宰府においてもよんでいる。

元年立春

天は長く寒くして万物の洞みにたるを慰みて

晩冬に催がし立つ 早春の朝

浅きと深きと何れの水か氷なほ結べる

高きと卑きと山として雪の消えざることなし

(下略)

などと詠じている。これは白氏文集の、たとえば、

府西池

柳気力なくして條先づ動き

池に波の紋ありて氷尽く開く

今日知らず 誰か計会して

春の風春の水一時に來らむこと

などと通ずるものであり、また元稹と白居易が贈答したところの『元白唱和集』にみえる、

水田地に消えて蘆錐短かく

春は枝條に入つて柳眼低^なる

などの元稹の作にも通ずる詩情である。要するに冬の氷のなから、春がうごき出してくることに興味を感じるのであり、氷は旧年の象徴であり、花や柳は新春の象徴であり、元白は年内立春ということはうたわなないまでも、その詩情をうたったものがあつて、元白を愛誦した道真あたりが、この詩情を年内立春というものに結びつけたとみられる。

このあとをうけ、道真と同じく大内記を歴た貫之が、元白を愛誦し、道真の詩をも消化していたことはうたががなく、したがって年内立春の意識はかなり確立されていたにちがいない。(下略)

「要するに冬の氷のなから、春がうごき出してくることに興味を感じる」「詩情」と言うが、この観点で菅原道真「元年立春」の詩を見ると、その「春がうごき出してくる」のは、「天」の「愍み」によると考えられた、ということになるであらう。すなわち、天は寒い冬が長く続いて万物に元気の無いことに心を痛め、年明けを待たずに春を立たしめた、それは天の配剤による、ということである。以下、詩は年内立春の春暖の情景を讃えるが、翻つてその筆は太宰府流謫の我が身の上に及び、「根拔樹^三花思斷^一 骨傷魚豈浪情揺^二」と、ひとりその恩恵に浴せないことを嘆く。天の感じて「年内立春」となった、せっかくの好時節に恵まれながら、我が身はひとり不遇を託つばかりである。そこで彼は、想いを都へ馳せる。「偏憑^三延喜開^二元曆^一 東北廻^レ頭拜^二斗杓^一」。彼は、その年、年号を新たに「延喜」と改元して治政に臨む、醍醐天皇の仁慈を期待して、都の方、東北の夜空を仰いだのであつた。「浅き水も深き水も氷がまだ結んでゐるのは何処にもなく、高き山も低き山も雪が消えない山はないと延喜改元の御代となつて萬物は皆春の喜びにあつてゐることを作つて、暗に菅公自身の境遇を反映されてゐる(柿村重松

『倭漢新撰朗詠集要解』。

そこで改めて考えられるのは、冒頭で「年内立春」を天の配剤としたのは、畢竟それは、天皇の仁慈に天が感じた結果だと、言わんとするものではなかったか、ということである。天皇の仁政に天が感応して、あたかも改元した、その年のうちに春を立たしめた。年明けを待たずに春が来たのは、帝徳に天が感じた結果である。この詩の背後には「年内立春」に対する、そういう捉え方があったことを窺うことができる。

とすれば、『古今集』巻頭歌、「年の内に春は来にけり」も、年の明けるのも待ちきれずに、勇んで春が馳せ参じて来た、という慶びを詠じて、結果的に、帝徳を讃えた歌となっているのではないか。季節の順行というのは、それ自体慶ぶべきものだが、それはもとより帝徳の現れでもある。それは当然のこととして、このたびは、その上を行って、年の明けるのに先んじて、慶ぶべき好時節が勇んで到来して来た。天皇の仁政を慕ってのことであろう。それほど、今時天皇の仁慈は、広く深い、ということを、結果として歌うものではなかったか。

「ひと、せを去年と言はむ今年と言はむ」。それは、そうした慶びを、驚き、とまどいの形でことほいだものである。春もすぐそこ思っていたところ、何と今年は年も明けない先に、春の方から来てくれた。何とめでたい御代ではないか。さても、この春。この一年を、何と呼んだらいいものか。「年内」だから、「今年」と言おうか。「立春」だから、「去年」と言うのか。

そうした、言わば嬉しい悲鳴によつて、結果的に治まる御代を慶び、帝徳をことほいだのが、この歌だったのではないだろうか。

そう考えるとき、この歌は、本朝最初の勅撰和歌集の開巻を高らかに告げる、巻頭慶祝の歌として、まさにふさわしいものになるのではないか。

されば、『古今和歌集両度聞書』に言う。

扱此集はよく物の法度を直にするに、大かたさしむきたる立春をば入ずして、年の内の立春入る事は如何。此集は、是君子の徳、万姓の楽みあらん事を元とせり。春と云は、四時に取ては祝いの時、万物の始めなり。春の来たる事は恵みの発する義なり。然れば仁徳も末遠く起り、民の心も楽むべきを、先づ尺する義なりとぞ。

(5) 周知の如く『源氏物語』若紫の巻は、この段に基づいて書かれている。若紫の巻を以って『源氏物語』執筆乃至発表の最初とする方向で考える説は少くない(島津久基『対訳源氏物語講話』、阿部秋生『源氏物語研究序説』、玉上琢彌『源氏物語研究』等)が、その点からすれば、『源氏物語』始発の巻としての若紫の巻の踏まえるべきものとしては、『伊勢物語』のこの段がむしろふさわしかった、と言うことができようか。

(6) 「秋のけはひ入り立つまゝに」と始まる『紫式部日記』も同様。あるいは、「七月十日のほど」の月を詠んだ「めぐりあひて」の歌に始まる『紫式部集』も、また。

(7) この間の事情については、拙稿「平安朝における物語―長恨歌から源氏物語へ―」(『源氏物語序説』)にやや詳しく述べた。

付記 本稿成るに当って、平成二十三年度成城大学特別研究助成を受けた。